

小林幸男先生の御退職にあたって

小林幸男先生は、一九九八年三月末をもって、定年で本学を御退職される。

先生は、日露戦争以後の日露、日ソ外交史を研究され、御著書『日ソ政治外交史』をはじめ数々の御業績により、この分野での第一人者として貢献されてこられた。御関心は幅ひろく、大正期の政治過程、治安維持法成立過程、天皇制下における挙国一致体制分析など、近・現代史に及んでいる。わたくしたちにも常に歴史的な見方の重要性を強調されてきた。

先生は、一九九〇年立命館大学を定年で御退職後、創立メンバーのおひとりとして、設立二年目に本学部教授に就任された。教育にはことのほか情熱を燃やされ、とりわけ学生の自主性を育てることを重んじてこられた。演習では、学生に共同研究を組織するよう促され、熱心に指導されこられた。さまざまな相談にも親身になって応えられ、多くの学生に慕われておいでである。学会に出張された折りに、開催地周辺に居住する本学学生の父母と懇談されたこともあった。

学生を思うお気持ちは教授会での御発言にも十分うかがわれた。一九九三年の大学設置基準の大綱化にともなうカリキュラム改革では、学部検討委員会の委員長として活躍された。先生のお考えは、教員が一方的に改革するのではなく、学生の声を聞くとともに、教員も学生に語りかけながら、よりよいものを創造していくことにあったと思われる。こうした姿勢は教育の面だけでなくあらゆる問題に共通していた。八年間の御在職中、先生の理想は、さまざまな障碍もあり、実現にいたらないことも多かった。本学部はまだまだ基礎を固める段階にあり、先生が去られ

ることは残念でならない。

まだまだお元気で意気軒昂な先生に、これまでと変わらない御叱咤と御助言をお願いする次第である。

京都学園大学法学会

会長 立石 雅彦

(三先生の本学就任年の順による)